

正定聚について

『方便から真実へ 浄土真宗』より抜粋

P 4 正定聚しょうじょうじゆとは、信仰しんこうが徹底てつていすれば、ふたたび迷まよわぬ身みになったという自覚じかくがつくので
す。正決定しょうけつじようの仲間なかまい入いりをした人ひとということです。「信受本願前念命終しんじゆほんがんぜんねんみようじゆうしやうじようじゆ、正定聚しょうじょうじゆの数かずに入い
る、即得往生後念即生そくとくおうじようごねんそくしやう、必定ひつじようの菩薩ぼさつなり」と聖人しようにんがいわれましたが、本願ほんがんを聞き開ひらいた人ひと
は前まえの命いのちが終おわったぞ、極樂参ごくらくまいりが決きまったぞ、次つぎの息いきを吐はき出だした時ときは、心こころの往生おうじようをして
いるから迷まよわぬ菩薩ぼさつになつたと讃ほめてあるのです。

P 3 8、正定聚しょうじょうじゆの機きとは、第十八願だいじゅうはちがんの信者しんじやのことです。絶対ぜつたいの機きが照てらし出だされて、絶対ぜつたい
の法ほうと一体いったいになつたとき、法ほうを見てよし、機きを見てよしの機法きほう一体いったいにさしていただき、ふた
たび迷まよわぬ身みになつたという腹はらの据すわりのできた人ひとを正定聚しょうじょうじゆの菩薩ぼさつ、これを第十八願だいじゅうはちがんの

行者ぎようじゃと言いうのです。

P 7 6、正定聚しょうじようじゆというのは、唯除逆謗ゆいじよぎやくほうと捨すてられた機きが、至心信樂ししんしんぎよう己おのれを忘わすれて仏ぶつ凡ぼん一体いつたい、機法きほう一体いつたいにさしていただいたのですから、ふたたび迷まよわぬ身みにさしていただいたといいう大自覚だいじかく、大満足だいまんぞくしたのですから、正定聚しょうじようじゆの菩薩ぼさつと言いえるのです。

P 1 9 5、本願ほんがんを受うけ取とった時じ（信仰しんこうが徹底てつていしたとき）前まえの生命いのちは終おわったぞ、そのとき再ふたび迷まよわぬ身みになつたから、正定聚しょうじようじゆの仲間入なかまいりができたのです。自力じりきがつきて他力たうりきにいあき上あがつたぞ、これを心命終こころのおうじようといいいます。次つぎの息いきを吹ふき出だしたときは即得往生そくとくおうじようしているぞ、即時そくじに必ひ定つじように入いる、聞きき開ひらいたと同時どうじに決けつ定じよう必ひ定つじようの仲間入なかまいりをしているから、これを必ひ定つじよう

の菩薩ぼさつというので、腹はらの据すわりができたのだから、他力たうりきの金剛心こんごうしんといえるので、弥勒菩薩みろくぼさつと同じ信仰おな しんこうになれたのだと讃ほめておられるのです。

P209、不退転ふたいてんに住じゅうするとは、退転たいてんしない仲間入なかまいりができる、金剛堅固こんごうけんごの信心しんじんになれる、往生おうじょうに対して腹はらの据すわりができる、不安ふあんがなくなる、疑うたがいが晴はれるということです。

P211、第十八願がんの人ひとを、住不退転じゅうふたいてんというのです。この人ひとは実機じつきが照てらし出だされ、この逆謗ぎやくほうの屍しかばねを法ほうが貫つらぬいていますから、機法きほう一体いつたいの信仰しんこうといい、いま助たすかっているから平生業成へいぜいごうじょうといい、今いまの生活せいかつを喜よろこぶのです。

P212、聖人は「正定聚の数に入る、即時に必定に入る」といわれたのは、決定、必定、正定聚とは疑いのなくなった、ゆるがぬ、不安のない、徹底した信仰のことを、不退転地を得る、住不退転と言われたのであります。

P274、たとい四重の破人に逢っても動揺しないのが、二種深信が徹底したのでありますよ。四重の破人とは、智者や学者がきて悪口を言っても平気でおれるのが、往生の信心決定というのです。声聞縁覚が悪口を言っても安心しておれるのが、清浄の信心決定というのです。菩薩がきて、往生はできないと悪口をいっても平気でおれるのが、上々の信心決定というのです。報仏化仏がきて、そんな信心では往生はできないといっても、あなた方に助けていただくではありません、阿弥陀様に見込まれて摂取されたのですからお構いなくと、平然としておれるのが、一念疑退の心なしという決定心なのです。

P560、「真まことに知しんぬ、彌勒みろく大士だいしは等覺とうかくの金剛心こんごうしんを究きわむるが故ゆえに、龍華りゅうげ三會さんえの曉あかつきに無上覺むじょうかく位いを究きわむべし、念仏ねんぶつの衆生しゅじょうは、横超よこちょうの金剛心こんごうしんを究きわむるが故ゆえに、臨終りんじゅう一念いちねんの夕ゆう大般涅槃べだいはいつねはんを超ちよう証しょうす」と御説教おせつきょうを聞きくと、自分じぶんが横超おうちょうの金剛心こんごうしんを究きわめたように自惚うねれる

P591、心光しんこうとは、仏心ぶつしんと凡心ぼんしんが一体いったいにさしていただいた、信後しんごの光明こうみょうを心光しんこうというのです。撰取せんしゅ不捨ふしゃの利益りやくに預あずかったときを、心光常護しんこうじょうごの益やくといって、ふたたび迷まよわぬ自覺じかくがついたので、和讃わさんに、

「金剛堅固こんごうけんこの信心しんじんの　さだまるとききをまちえてぞ　弥陀みだの心光照護しんこうしょうごして　ながく生死しやうじをへだてける」

この信決定の人を、正定聚の菩薩というのです。

P 6 2 0、死んで五十二段の証果は嘘ではないが、本当ではありませんよ。死なねば五十二段は超証できないけれども、それは結果ですよ。原因は何かご承知ですか、信樂開発、仏智満入、仏凡一体が原因ですよ。御文章に「正定と滅度とは一益と心得べきか、また二益と心得べきか、正定聚は穢土の益なり、滅度は浄土にて得べき益なり、されば二益と心得べきなり」

P 6 7 9、信仰が徹底するまでお聞きなさいよ、満足ゆくまでお求めなさいよ。地獄一定が極楽一定になる大問題ですよ、一念とは流転の絆の切れた一刹那ですよ、再び迷わぬ身にさ

して頂いた、大自覚のついた一刹那ですよ、「真実浄信心は内因なり摂取不捨は外縁なり、本願を信受したとき、前の命は終わったぞ（心命終）」とは、自力の機執の浄尽した時であり、正定聚の数に入る、即得往生後念即生は他力不思議に生かされたのですから、即時に必定に入る、是はこれ必定の菩薩なり」と仰せられてありますが、機の醜さから言え
ば下下の凡夫でも、法の徳から言えは菩薩ですよ、晴れたか晴れぬかわからぬような無自覚
で、摂取されたといえますか、この味の無いのを、「これを知らざるを以て他門とし、この
味を諦得した仏凡一体になった人を、真宗のしるしとする」と仰せられたのですよ。

弥陀仏の本願を憶念すれば自然に（他力不思議で）、即時に（同時に、聞即信の一念
に）、必定（再び迷わぬ身になったという大自覚）に入る、聖人が信一念を説明されて、
「一念とは 信楽開発の時刻の極促を顕し、広大難思の慶心を彰わす」とおっしゃってあ
りますが、弥陀の名号を聞けば光明無量が届いて信、寿命無量が届いて楽、今までうんとも

すんともいわなかった機^きが、
仏智満入^{ぶつちまんにゅう}の一刹那^{いちせつな}、
扉^{とびら}の開^{ひら}けたのが開発^{かいほつ}、
その一刹那^{いちせつな}、
広大難^{こうだいなん}
思^しの大慶喜^{だいきようき}、
ふたたび迷^{まよ}わぬ身^みになつたという
大自覚^{だいじかく}が得^えられたのでありますよ。